京都教育大学ＦＤニュース

No.100
2023 年 3 月 22 日
京都教育大学ＦＤ委員会

****

本学における FD 活動の一環として実施しています「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。今回の FD ニュースでは、「2022 年度第 2 回 FD 研修会」、「2022 年度大学院教育学研究科授業アンケート」、「2022 年度後期授業アンケート活用状況及び後期中間アンケート実施結果」について報告いたします。

****

１．2022 年度第 2 回 FD 研修会の報告

2022 年 11 月 16 日（水）13:00-13:50 に第 2 回 FD 研修会を開催し、就職対策委員会より本学連合教職実践研究科の佐古清先生と佐藤卓也先生に「就職対策のために：教員採用の今後の動向・キャリア支援の在り方について」という演題でご講演いただきました。

まず、教員採用の今後の動向として、受験者数の推移、公立小中学校等の教職員定数、子どもの出生減、教員の急激に進む世代交代、定年年齢の引き上げと役職定年制について客観的なデータが示されました。教員志望者数の減少が最大の課題であること、基礎定数が減少しても加配定数の増加とともに教職員定数はなんとか維持されていること、しかし国の予想を上回る出生減で幼稚園・小学校の学級減が到来すること、若い先生の増加と定年年齢の引き上げにより採用減が見込まれること（とりわけ今の 40 歳代の教員が退職を迎える頃の懸念）などについて、リアリティがあふれるお話でした。

次に、キャリア支援の在り方として、まず教員志望の妨げとなっているブラックイメージを大学教員が払拭すること、そして教員採用試験合格のためだけでなく入職後も困らないためのアドバイスが大切であることを強調されました。具体的には以下のことを力説されました。

・コロナ禍でかえって進んだ働き方改革により、学校は変わりつつあります。教員の仕事はブラックではありません。今こそ、教員の使命ややりがいを伝えていただきたいです。
・教員になりたい理由を改めて学生にたずねてみてください。採用試験用の答えではなく、教員という仕事を選ぶ理由を自分の中で整理して言語化できているか、本当に自分と向き合えているかということが大切です。
・教員は人と関わる仕事です。子ども・保護者・同僚に関わり、うまくやっていける力が必要。人間理解が浅いと折れやすい。大学時代に人間理解を深めておくことが肝要です。
・レジリエンスを高めましょう。日本では養成段階と入職後の乖離が顕著ですので、リアリティショックに備え、自己肯定感をもち失敗してもめげないことです。
・自分はここで何を学ぶのか、目的と学びを意識化することが大切です。「教員としての資質の向上に関する指標」をもとに、出口での姿を描いてそこから逆算して今の学びをとらえることが大切です。

奇しくも 1 ヶ月後の 12 月 19 日に中央教育審議会は「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」という答申を出しました。その「おわりに」の中では「今回の答申は、教師の養成・採用・研修の一体的な改革を通じ、教師が創造的で魅力ある仕事であることが再認識され、志望者が増加し、教師自身も志気を高め、誇りを持って働くことができるという将来を実現するための提言である。」とされています。佐古・佐藤両先生のほとばしるヒューマニズムはこの提言にまさに血を通わせ、私たちを「また、明日からがんばろう。学生と真摯に向き合おう。」と鼓舞するご講演でした。

２．2022 年度大学院教育学研究科授業アンケート結果調査について

2022 年 11 月～12 月に実施した大学院教育学研究科の授業アンケートの結果について、ご報告いたします。

回答者数は、学校教育専攻 15 名中 5 名（33.3%）、障害児教育専攻 4 名中 0 名（0%）、教科教育専攻 37 名中 15 名（10.5%）であり、過去 2 年間と同様の低い回収率となりました。在籍者が 2 回生以上のみとなるため、履修科目数は 43 と、2021 年度の 282 から大きく減少しました。

「２．授業への取り組みの意欲」および「３．授業に対する満足度」の設問では、肯定的な回答（とても／やや意欲的に取り組んだ、満足した）が 43 件中 42 件とほぼ 100%を占めており、回答した受講生は、授業に意欲的に取り組み、満足を得られたことがわかります。「５．体系的な授業」の設問は、「とても／ややまとまっていた」が 40 件、「６．受講生の理解や反応をふまえた授業進行」は「とても／ややそう思う」が 42 件、「８．教員となるうえでの有用性」は「とても／やや役立つと感じた」40 件となっており、これらの設問についてもおおむね肯定的に捉えられているといえそうです。否定的な回答は、1 件を除きすべて「特別演習」に対するものでした。

「４．難易度」については、「とても難しかった」が 12 件（27.9%）、「やや難しかった」が 23 件（53.5%）となっています。「とても難しかった」の割合が前年度（6.0%）に比べて大きく増加していますが、回答件数の減少によるものではないかと思われます。「７．シラバス」については、「とても／やや参考になった」が合わせて 41 件でした。

「現職教員とストレートマスターで構成されている授業を履修して感じたこと」（自由記述）に関しては、前年度までと同様、現職教員が現場での経験について話すことが多く、その話が体系的・理論的でないと感じたという回答が複数ありました。一方、現職教員からは、「専門の勉強をしてきたストレートマスターの知識や考えの深さは素晴らしいと思った」、「若い人と一緒に学ぶことで得ることはたくさんあるように感じる」との回答がありました。「（授業担当教員が）どのような経験の人でも意見を言いやすい空気を作ることで有意義な時間となる」、「教員の裁量によるところが大きい」、「ストレートマスターと現職教員が、共に話し合い、学び合うことができるようになればよりよくなると思う」という意見もあり、経験の異なる受講生同士だからこそ共に学び合えるという実感がもてるような配慮と工夫が、授業者には求められていると思われます。

３．2022 年度後期授業アンケート活用状況調査及び中間アンケート実施調査結果について

2022 年度後期の授業アンケート活用状況および授業中間アンケート実施状況に関してアンケートを行いましたので、結果をご報告します。回答件数は 47 件でした。（2021 年度後期は 53 件、2022 年度前期は 59 件でした。）

Ⅰ　２０２２年度後期の教育学部の授業に対する授業アンケート結果の活用状況について

問１　過去の授業アンケートの結果を２０２２年度後期の教育学部の授業に反映させている。

「はい」→ 38　「いいえ」→ 1　「過去に授業アンケートを実施していない」→ 8

問２　授業に反映させていない理由についてお聞かせください。（自由記述）

・すべて、「新任などのため本年度から本授業を担当したから」、という主旨の回答でした。

問３　授業に反映させた内容についてお聞かせください（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数（38）に対する比率
時間外の学習時間を見直した	4	10.5%
意欲的に取り組めるよう対応した	11	28.9%
テーマ・領域を見直した	2	5.3%
教職への意欲・動機が高まるように対応した	12	31.6%
難易度を見直した	15	39.5%

体系的でまとまった授業を心がけた	7	18.4%
授業の説明をわかりやすくした	10	26.3%
テキスト（配付資料など）のレベルを見直した	5	13.2%
速度（進度）を見直した	14	36.8%
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	15	39.5%
その他	3	7.8%
【その他の回答内容】 ・現在の授業スタイルで良い。 ・テキストの書き込み部分の文字を大きくした ・授業内の時間配分		

ほとんどの先生が授業アンケートの結果を授業に反映されています。反映した内容としては、「難易度を見直した」、「受講生の理解や反応を受けとめるようにした」がもっとも多く、反対に反映させられなかった、あるいはさせづらかった内容としては、「テーマ・領域を見直した」、「テキスト（配付資料など）のレベルを見直した」が挙げられています。確かに、授業のテーマや領域自身を変更することは困難で、また学生に伝えたい内容が決まっている以上テクストなどの変更も難しいと考えられますが、多くの先生がそうした制約の下でも、受講生の声に耳を傾けて、できる限り受講生が理解を深めることができるように工夫しておられることがうかがえます。

Ⅱ　２０２２年度後期 教育学部 授業中間アンケート実施結果調査について

問１　独自作成のものも含め授業中間アンケートを実施した。

「はい」→ 36　「いいえ」→ 11

問２　授業中間アンケートを実施しなかった主な理由についてお聞かせください。

<u>時間に余裕がないため</u>

・授業時間に余裕がなかったため（同様の回答４件）

・授業時間内に実施する時間を確保できなかったことと、前期と同じメンバーで授業を行っていて前期にアンケートは実施済みだったため。

<u>少人数であるため</u>

・受講学生が少数（5 名以下）のため。

<u>独自の取り組みをしているため</u>

・ファームズで授業についてのコメントを尋ねる形式をとっている。

問３　使用した様式についてお聞かせください。

「FD 委員会の様式」→ 33　「独自の様式」→ 1　「無回答」→ 2

問４　中間アンケートを実施した結果についてお聞かせください。

「意義があった」→ 22　「どちらかというと意義があった」→ 11

「どちらかというと意義がなかった」→ 0　「意義がなかった」→ 0　「無回答」→ 3

問５　授業中間アンケートの結果について、受講生と話し合ったり言及したりされましたか。

「はい」→ 27　「いいえ」→ 9　「無回答」→ 0

問 6　授業に反映させた内容についてお聞かせください（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数（36）に対する比率
時間外の学習時間を見直した	0	0%
意欲的に取り組めるよう対応した	8	22.9%
テーマ・領域を見直した	3	8.6%

教職への意欲・動機が高まるように対応した	4	11.4%
難易度を見直した	8	22.9%
体系的でまとまった授業を心がけた	2	5.7%
授業の説明をわかりやすくした	12	34.3%
テキスト（配付資料など）のレベルを見直した	3	8.6%
速度（進度）を見直した	10	28.6%
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	15	42.9%
その他	9	25.0%

【その他の回答内容】
・授業内容や課題への対応が意欲を促進できていることを確認できたので授業の方針をそのまま継続している。
・今のまますすめる
・早く終わって欲しいとの要望を検討中
・正答を復唱するようにした（学生の声が小さいので）
・学生から出た意見をそのまま公開し、今後の授業で「変更するところ」「変更しないところ」を説明した。
・室温が適切になるようにした
・まだ見にくい部分を見えやすく改善した。
・現在の授業スタイルで良いことを確認した。
・アンケートの結果、これまでの授業に問題がなかったので、そのままの方法で継続した。

問７　ＦＤ委員会様式の「授業中間アンケート」の設問についてお聞かせください。
「現状のままでいい」→ 37　「改善の余地あり」→ 2　「無回答」→ 8

問８　問７について具体的にお聞かせください。
・基本的には講義形式の授業を想定した質問になっており、アクティブラーニング対応の質問になっていない印象です（特にQ2「説明は分かりやすいか」）。シラバスに「アクティブラーニング」と明記している以上、基本フォーマットにも設問として加えておいてはいかがでしょうか。
・学生が本授業でどのようなことを期待しているのかが具体的にわかる回答が得られたら、さらに授業改善がしやすように思う。

問９　今回、「『Google Forms』による『授業中間アンケート』の作成方法」を、FD委員会のwebページに掲載しました。こちらを参考にし、「授業中間アンケート」を作成、実施されましたか。
「はい」→ 3　「いいえ」→ 29　「以前から「Google Forms」を利用していた」→ 7　「無回答」→ 8

36名の先生方が中間アンケートを実施したと回答しています。そのほとんどの先生方が、中間アンケートに「意義があった」、もしくは「どちらかというと意義があった」と回答しており、中間アンケートは授業改善に少なくとも一定の有効性をもっていると考えられます。中間アンケートを「授業に反映させた内容」と、授業アンケートを「授業に反映させた内容」を比較してみると、「授業の説明をわかりやすくした」、「受講生の理解や反応を受けとめるようにした」の二つの項目で、中間アンケートの方が「反映した数に対する比率」が高いことが目を引きます（それぞれ、26.3%→34.3%、39.5%→42.9%）。このことから、授業の途中のため大きな変更は難しいながらも、多くの先生がアンケートの結果を受けて、可能な限り学生に寄り添おうと努めていることがわかります。

アンケートの設問に関しては、現状のままでよいという回答が多数を占めました。その一方で、具体的な改善案もご提案いただきました。今後FD委員会ではこれらのご提案を受けて改めてアンケートの内容を精査し、授業改善のよりいっそうの助けとなるアンケートの作成を目指していきます。

****

内容について、問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：中（委員長）、荻野、東村、西本、寺田
（事務担当：河原田、村田、西松）